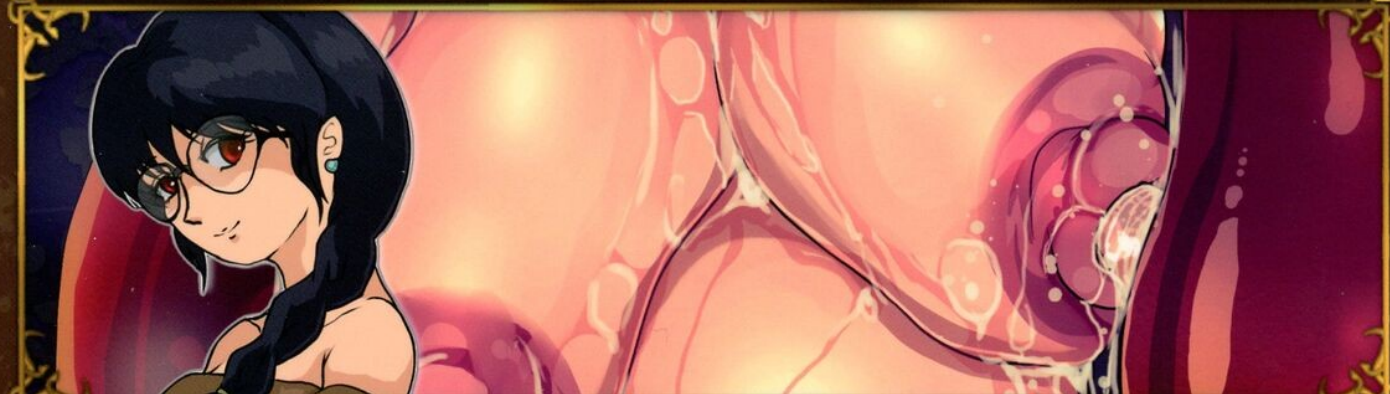
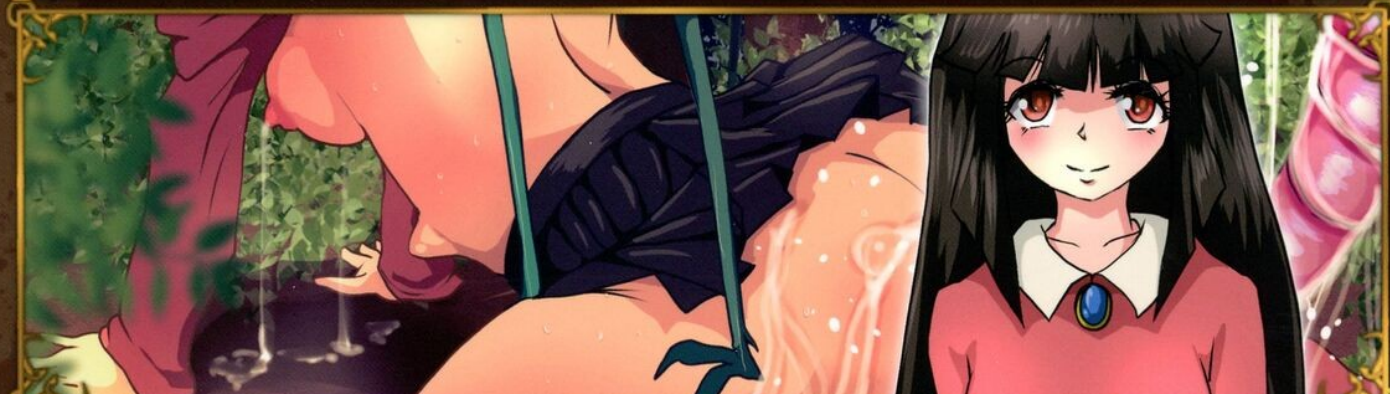




異種和姦&孕ませ
SITUATION STORY

SolySombra

H A R A M A S E



[OVER 18 ONLY] *DO NOT ENTER* HIGH LEVEL VISITORS ONLY

らばた工房

SolYSombra ～ Grant ～ 2006/04/18



SolYSombra ～ Wisteria ～ 2006/06/22



SolYSombra ～ Freia ～ 2006/11/18



SolYSombra ～ Mystic ～ 2006/10/17



◆ 本誌の「SolYSombra」は2006年に製作されたDL作品シリーズ (Elastic仕様の為、現在は販売中止) の新作です。
一部の熱烈なラーバタス来訪者の方々のお声に押され、16年ぶりの製作となりました。16年もの間、ラーバタスの世界は、
ずっとその方々と共にあったのです。これからも、いつだって、ラーバタスの世界は、みなさんのご来訪をお待ちしております。

高石ふう

奥付「SolYSombra HARAMASE」初版 2022/08/14 (C100)

・サークル名：らばた工房 (EroticFantasy ラーバタス)

・著者：高石ふう support@larvatus.skr.jp / Twitter: @lavatakoubou

SolYSombra

プロローグ

やわらかい午後の光が影をつくる
心地よい風が吹き抜けていく

現実と眠りの世界のはざま
光る暗闇に気が付いた

……なんだろう
あそこには何が
あるんだろう？

覗いてはダメ
行つてはダメ

でもきつと 見つけられたのは 私だけ
少しだけ 少しだけだから……

まどろみは誘う はるかな世界へ
光と 影とが 重なり合える場所へ

夢と 魔法と
淫獣の国へようこそ



ダンジョンエントランス

ひんやりとした
ダンジョンの地下1階
大きめの触手が
這い出してきた

足にまとわりつき
服を脱がそうとする

女は 触手の
好きなようにさせた
触手は 女の丰满な
胸に掴みかかり
服の上から乳首を吸う

「私 もっぴかなくちゃ」
触手は女を離さない
強い力でひきとめる

女は諦めて微笑む
触手は女にまきつき
愛おしそうに
その体を舐め始めた

阿川美歩

月夜の取水所

月が きれいな夜
水路から背ひれのついた
モンスターが上がって来た
まるで女と待ち合わせたように

モンスターは女を抱きしめると
強引に 口に舌をねじ込んだ
女はそのままモンスターの
したいようにさせていた

湖から湧き出る水は冷たくて
どこまでも透き通り
月がゆらいでいる

女は 脱がされ すぐに挿入された
モンスターの腰が動くたびに
女の胸は膨らんでいく
膣を巨大な性器で埋められ
顔ごと加えられながら
女は舌を絡ませる
女の腹に性器のカチチが見える
気が付けば女は
自分で腰をこすりつけている
くぐもった喘ぎ声が
モンスターの口の中から聞こえる
女は痙攣しながら
快楽をむさぼっていた

魔屋の利用料

暑い日差し 森の中を歩き疲れて
女はすこし休憩をすることにした
人に捨てられた家
中はひんやりとして心地がよい

この魔屋には 一匹のモンスターが
棲んでいた 彼は自分の住まいの
利用料を 女に要求した
女は しかたなく受け入れる
汗でからだに張り付いたシャツを
たくしあげると 豊かな胸がこぼれる
モンスターは大喜びで女に抱きついた

彼の性器は3本あった 股間にひとつ
せなかに2つ ふとももに爪を立て
女のなかへ 深く突き刺す
柔らかく濡れた女の膣内へ
パンパンに張った乳房の中へ

「あつ……あつ……ふあああ」
握った性器が脈打ち乳房の中に射精される
腹の中は既に 精液でいっぱいだ

ひとしきり犯され 胸と腹が熱い
とにかく代償はお支払いした
……が なんと外は 雨が降って来た
今度は雨宿り料をお支払いしなくては
いけないらしい

彼は太くて硬い性器を女に突っ込み
また利用料の回収をはじめた



ゆりかごの中で

その巨大な芋虫は
女から離れようとしなかった
今日こそは想いを遂げるのだ

いつものように
アロカシアの葉のゆりかごで
揺れ合ったあとも 芋虫は
女から性器を抜かなかった

女は半分目を閉じながら
芋虫を見つめる 芋虫は再び
女の奥深くに性器を挿入し
夢中で性器を動かす

女が感じたのは 快楽と 彼の想いだ
「わ……かった……いいよ……孕ませて」
芋虫は 女に舌をねじ込んだ
女はその舌を吸いながら
触手のような足に強く抱きしめられる

「んっ……んん……」
若く力強い 抱擁のなか
女は自分の中に 大量の
精液が流れ込むを感じた

そして腹が
焼けるように
熱くなり
女は孕んだ

「もう終わり……放し……てね？」
女はささやくように
今日の別れを告げた でも女は
芋虫の 次の欲望も解っていた

「はあはあ……満足した？」
優しい微笑みを向ける女
芋虫は 女に抱きついたまま
離れようとしなかった



フォンタラムの迷子

このあたりは入り組んでいて 慣れた者でも迷ってしまう
そんな迷い者どうしが鉢合わせした

モンスターはともかく 獣人と交わるのは
リスクが大きい そもそも全面的に禁止だ
孕まされ 捕獲されれば 獣人の苗床に
なってしまうからだ

「でも 彼らだって 好きで
獣人になった訳ではない……」
女はよくそう思っていたが
もちろん 口に出したことはない

女は 彼らが不憫に思えてしまった
逃げ遅れたふりをして捉えられる
獣人は不器用な手つきで 女を脱がせた

ストッキングを突き破り
巨根が挿入された
女の腹にはくつきりと
その形が突き出ている

一心不乱に腰を振る獣人
女は 膨らんだ胸を
上下に揺らしながら
小さく声をあげつつけた
誰かに 彼が
見つからないように

水瀬朋美

精液と命の天秤

夜になり ひとけは無い
ただでさえ ほんとと
使われなくなったこの廃道で
女は犯されていた

大きく張った乳房と硬く勃起した乳首に
細長い触手がねじ込まれる

さらには巨大な性器が腹を串刺しにしている
脳への刺激からか 女は痙攣したまま
聞き取れない言葉を喋っている

「イかせ続けなければこちらがやられる」
そう思ったのか猛烈な勢いで女を犯した
おかげで女は これまで経験したこと
のないような強烈な快楽を味わった
数えられない程 徹底的にイかせられた

モンスターは女の耳の奥へに
長い舌をねじ込んでいる
まるで脳をかき回されているようで
とんでもない快楽だという

モンスターは女を犯しながら
その使い込まれた
ロングソードを気にしていた

モンスターは大量の精液を出しつくした後
森に逃げ込んだ 生き延びる事が出来たのだ
女は 月をみあげながら かき回された脳と
モンスターの精液でパンパンに張った
自分のカラダで 快楽の余韻を楽しんでいた

袋小路の隠し迷宮

腰をかがめて ようやく
通れるほどの高さの
せまい通路

残念 ここは行き止まりだ

壁の穴から巨大な芋虫が
あらわれた この狭い
通路では 女の自慢の
ロングソードも分が悪い

……ご存じだろうか

剣士の中には自分のカラダが
傷つく事で興奮する者もいるのだ

女は既に恍惚としていた

着衣を引き裂かれ 乱暴に犯される
しかもこの芋虫は多根モンスターだ

女の股の下で 何本もの性器が

その順番を待っている

ただでさえ1本の射精量は
とても多いというのに！

この暗くて狭い通路で

女は長い時間犯される

頭を加えられたまま

長い時間 挿入され続ける

女のカラダは痙攣し始め

手がだらりと垂れ下がる

しかし芋虫に 自分の尻を

叩きつけるように

腰が勝手に動く

口の中に流し込まれる

唾液と同じくらい

乳首から母乳が流れ出る

芋虫にとって

久しぶりの獲物だったのだろうか

芋虫は乱暴に女にとびかかった

その稚拙な攻撃で

女はすこし傷を負ってしまった

芋虫が全部射精するまで

この夜は終わらない

女は意識をトバしたまま

その快楽をむさぼり続ける

防波堤の岩陰

潮風が心地よい岩場の海岸

女は 両目が左右に

大きく開いた

人型のモンスターと交わっていた

後ろから抱えられるように挿入され

乳首に指をつっこまれる

大声で喘いでも 岩にあたる波の音が

その声をかき消してくれる

「……いつ 孕みたいっ 孕みたいっ」

確かに女はそう叫んでいた

「孕む」と そこから快楽が
跳ね上がるのだ しかし
刺激だけでは 女は孕まない
射精の際に女が「ココロ」を
奪われた状態にあれば
女は孕む

「ああ……ッ！ あああ……ッ！」
膣と乳首への挿入が 恐ろしい
刺激となり 女はよだれを
流しながら腰をふる

「好きっ 好きッ……好きい」

絶叫しながら腰を反らす

女の腹がボコッと膨れた

脳を貫くような快感が

女を襲っ

女の「ココロ」を動かしたのは
快楽への欲求か……それとも
人になり損ねた種族への哀れみか
女はきつと 答えない

蛙と湿度と令嬢と

湿地帯の地下を通る道は
常に気温が高く 湿気も多い
巨大なヒキガエルが 紅潮し
汗をかいた小柄の女を抱いていた

女の小さな体は その巨大な
蛙の性器をすべて包み込んでいた
壁に押し付けられながら
蛙に抱きつき 腰をなすりつける
立ち振る舞いも
言葉遣いも丁寧なこの女が
こんなに乱れるのは よほど
気持ちが良いのだろう
口からよだれを 乳首から母乳を
垂れ流し 喜びの声をあげながら
女はずっと 突き上げられていた

ナナ・コンシュタット

快樂崩壊

セミの鳴き声が響き渡る
ここは虫たちの森
女は地面に這い
虫に犯されていた

とろけたような表情で
尻を突き出し
時々ビクビクと震えながら
虫の射精を受け続ける

女は 反るように腰を振り
虫の性器を刺激する
虫は 女のカラダが
よほど気持ちいいのか
羽をけたたましく鳴らし
ながら 射精を続ける

しかし 見えるだろうか？
虫の精液が 性器の先端
ではなく胴体部分からも
漏れ始めてしまっている

この女のカラダのもたらす
快樂が強すぎて
精液が虫の内部を壊し
溢れ出しているのだ

おそらく虫は この後
命を終え 灰となるだろう
女が気づくのはその後だ

精液シャワールーム

そのモンスターの頭部は
髪をとかずブラシのようになっていて
その先端からは精液が吹き出して
この熱い精液は 女を狂わす
皮膚から浸透し 強烈な快楽を
女にもたらすのだ

下半身を触手に
からめとられた女は
シャツをはだけ
胸に精液をいっぱい浴びた
ビクンビクンと震えながら
強烈な快楽をあじわう

精液は皮膚の外側だけではなく
女の腹の中にもたつぷりと
注がれている 子宮を突き上げ
触手の力タチが女の腹から
浮かび上がっている

触手たちは次を争うように
女のなかへ入ろうとする
女の子宮へ 精液を
流し込みたいのだ

女は胸を突き出しながら
腰をくねらせ
いっぽん いっぽん
触手たちを射精に導いた

ドリーネの王

地下の崩落によって出来る
この大きな穴（ドリーネ）は
外界と遮断され、ひとつの
小さな世界になっていた

さしづめ この
グリーンスライムは
この世界の王
なのだろう

女は その歓迎を受け入れた
自ら服を脱ぎ、ぬるぬるとした
表面に自分の肌を押し付け
抱きしめる

支配者へ 自分のからだを
もって奉仕するのが
おもてなしのお礼だ

「ああ 愛しき我が王……
どうかわたくしめを孕ませて
くださいませ……ッ！」

女はよだれを垂らし
下から突き上げられながら
懇願した

「イツ……いつ……きそうです
イツ……イツ……ッ……！」

女の腹は膨らみ 乳首からは
母乳が溢れ出す

この女のマナは濃く

最高のご馳走だ

王はこのデイナーを 余す所なく
堪能することにした

王は 訪問者を
手厚くもてなした
からだを変形させ
無限に作れる性器で
女を喜ばせた

……しかし
女は少し経験不足だった
空想レッスンと実戦は違うのだ
いつのまにか 奉仕は
なにか違った感情にすりかわる



肉塊と慈悲

何とも形容しがたいモンスターだ
巨大な肉の塊から
手のような触手が所かまわず
生えてくる

カラダを求めて伸びるその手に
女は特に抵抗しなかった
誰も見ていないのだ
この哀れな生き物の欲望を
叶えてあげたいと思ったのだ

その肉の塊は 女を後ろから
犯し始めた 喜びに震えながら
射精を繰り返す

喉に深くさしこまれた舌のような
触手から 精液が直接 胃に
流れ込んでくる 「こんな自分でも
命を癒すことができるなら……」
女はそれで満足だった

リゼル・クローディア

失われた古代魔法

女は 立場を利用して
王室アカデミーで厳重に管理されている
閲覧禁止の古文書を盗み見た
その古い書物に記された場所で
その手順を繰り返すと
バラバラに散らばっていた骨が
繋がりはじめ モンスターとなった

これは失われた禁忌魔法「モンスター生成」だ！
自分はその復元に成功した！ 女は大喜びをした
しかし 組みあがったモンスターは主（マスター）に
従うどころか 主を犯し始める それが驚くほど
気持ちよく 女はあつという間に膨乳する

……残念ながら「生成」ではなく
「眠りを覚ました」だけである
この骨は かつて古代の
高位女魔術師が 本人の慰み用に
作り出した 魔法生物だ

偶然にも 女はその古代の女魔術師と
同じ性癖をもっていたようだ 後ろから乱暴に
突かれて 何度もイッてしまう
肥大化した乳房が暴れ よだれがとまらない
壁にある鎖は自分を繋ぐためのものだろうか
女は想像するだけでまた イキそうになる
両手を縛られ 首を絞められ 犯されたい
講師の立場上 こんな性癖 誰にも言えないが
モンスターになら 知られても 構わない

雨の記憶

突然の雨　しばらくは止みそうにない
かつては冒険者で溢れていた
このビジャーセンタ―で
女は雨宿りすることにした
床のしたからゴソゴソと音がする

女の体温を感じてか
割れた板張りの床から
巨大なヒルが現れた

そうだ　あの日も雨がふっていた
「雨の日なら冒険者も少ないだろうから
自分もあぶれないだろう……」
そんな甘い打算だったのだ

ヒルは向こうから寄ってくる
自分を求めてくる　しかも複数!?
女は　受け入れた　モンスター相手
なのに　ここで自分が求められる事が
嬉しかったのかもしれない

ジヨブは何?　今日はどこへ行くの?
どこから来たの?　人気者のように
囲まれて質問攻めにされる……
そんな妄想のなか　女は犯される

体が開発され過ぎたのか
胸の肥大化が異常なサイズにまで
達している　母乳もよだれも大量だ
そしてその分　快樂も増大していた

女は思い出していた
かつて自分もここで冒険者
として訪れていたことを
うまく仲間にいれてもらえずに
ひとりでこの壁際にいたことを

飛びそうな意識のなか　女は既に
孕まされていた　簡単に孕むようにも
なっている　……それでもいい
満ち足りた世界で溺れていた

グノアールの門

正確に言えばモンスターではない
「コレ」は魔族である
門を守り 立ち入るものを選ぶ

はちきれそうな胸を突き出し
孕まされたまま犯される
射精されるたびに母乳は吹き出す

止められないのだ
自分ではどうしようもないのだ
孕んだカラダは食欲に性欲を
むさぼり続ける 快楽だけを
求め続け腰をふる

まるでモンスターのよう

女は何を求めてここへ来たのか
尽きない魔力が 知識の泉か
何のために強い力が欲しいのか
口から喉にねじ込まれる舌 乳首をしごき
首を絞められながら 何度もイカされる
……すべて見透かされている？

どれも 自分が心の底で隠していた欲望だ
犯されたい 狂ったように犯されたい

そういえば 自分は「選ばれた」の
だろうか？ ……いや無いだろう
自分はずっと選ばれない でももう
どうだっていい ここで永遠に
犯される もう 思考は不要だ
言葉も 世界も 自我も 不要だ

エピローグ

光だった場所は
影になって
影だった場所は
光になって

薄いレースの
カーテン越しに
重なり合って交じり合う

自分は今どこにいるの？
光のなか？ 闇のなか？

愛されているのは
ココロ？ カラダ？

どちらでもいい

こんなに満たされているのだから

堕ちていく 沈んでいく
深い とても深い

もう帰れない場所へ

